氏　　名　前川美行（まえかわ みゆき）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　論教博第 132 号
学位授与の日付　平成19年5月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　心理療法における偶発事について
——破壊性と力——

論文調査委員　（主査）教授 河合俊雄　教授 伊藤良子　准教授 田中康裕

論文内容の要旨

本論文は，心理療法における偶発事をテーマとして，その発生状況と影響とを事例を通して考察したものである。従来，偶発事は捉え難いために論ずるに値しないとされ，セラピストの不注意や事故，不運や幸運として扱われることが多かった。しかしながら，偶発事が重要な転機となることや何らかの大きな影響を及ぼすことがあり，心理療法の場ではそのような現象が発生しやすいことも否定できない。本論文では，Freudが外的偶然としながらも偶然の関与を無視できないものと考えていたことを明らかにし，Freudの無意識的意図やJungの共時的現象という視点との関連で偶発事を捉える試みをした。それにより，偶発事の発生状況や捉え方がどのような要因によって影響を受けているのか，さらに偶発事が転機として活かされるための要件について明らかにしようというものである。

このような第1章，第2章における偶発事を取り上げる意義や心理療法における偶発時についてのFreudやJungの捉え方のレビューを受けて，第3章では発生したいくつかの偶発事の内容と状況及び影響が，自験例3例に基づき検討された。

第1節では，アトピー性皮膚炎の20代女性の経過途中で起こったセラピストの妊娠・出産という偶発事を中心にセラピーの流れが検討された。クライエントがもう一人の自分を意識して動き始めた頃に起こった「妊娠・出産」と夢に現れた偶発事は，クライエントの超越へと向う動きを促進するコンステレーションの動きとしてみることができた。身体的領域と心的領域がともに動き出し隙間が生まれてきたことと，出産が結合と分離の結合の象徴的なイメージを喚起することとが相乗的に働いていたと考えられた。

第2節では，膠原病の20代女性との過程で起こった偶発事が取り上げられた。夢によって引き起こされた葛藤に耐え切れず面接を中断したクライエントが，セラピストとの再会という偶発事により面接を再開し，内面化が深まっていった。しかし再び現実の壁に突き当たっていたときに偶然開けた箱庭の砂箱に砂漠のような荒涼とした世界が現れた。これらの偶発事からは，内と外の入れ替わりが特徴として考えられた。

第3節では，「死」のイメージが色濃く漂う夢を見ていた40代女性が経過途中で交通事故という偶発事に遭遇し，そこから大きな展開が生まれた心理療法過程が取り上げられた。これは，クライエントが母親との繋がりを切ることで新たな関係で繋がり直していく過程と重なって起こっていた。切る/繋がる，動く/滞るという二つの相反する力が働きあっているところに偶発事が起こり衝撃を与え，身体という死ギリギリの体験を契機として切る力が働き始めた。やがて「二つの部分がずれながら大きく動く，時差」の夢で表されるように「切れながら繋がって動く」というイメージが現れた。

第4章では前章での知見が，他の事例を援用してさらに考察された。

第1節では，他の事例における偶発事や3事例に見られた偶発事が発生状況や内容について検討された。特に共時的現象として考えられる偶発事や，コンステレーションの力が現実を巻き込んだ現象として捉えられるものがあることが示された。

第2節では，衝撃的な偶発事が転機とならない場合についてPTSDの事例をもとに考察された。それには現象に過剰に意味を付与しようとするために現象そのものと出会っていないあり方が明らかとなった。また，過剰に意味づけしようとす

る態度とは逆に，単なる偶然として流してしまう場合も転機とならないことが示された。

第3節では，偶発事の起こりやすさと捉え方に関してクライエントの要因との関連が，神経症水準・精神病水準・身体症状・子供という分類で検証された。神経症水準の場合には偶発事は小さなものとして起こりやすく，流されやすく転機となり難いと考えられた。また，個人を超えた次元のイメージや症状が生じやすい精神病水準では，むしろ大きな偶発事さえ日常的になってしまい，抗いたい力を持って偶発事が発生して巻き込んでいくことが考えられた。さらに身体症状によって身体的領域と関わらざるを得なくなっているクライエントについては2事例からも考察されたように，共時的現象が起こりやすいことが示唆された。加えて，子供の遊戯療法では遊び本来の持つ性質が偶発事と関連したものであり，偶発事が起こりやすいことが考えられた。

第4節では，セラピストの要因との関連が考察された。まずミスやコンテインの不足が引き起こしたとしてみることができる偶発事を取り上げられ，さらにオリエンテーションの違いによって偶発事の発生や捉え方が異なることをFreud派の事例報告と著者の事例が比較して考察された。Freud派では現象を切り取って扱えるために，偶然の力が弱められるだけでなく，現象の持つ象徴的な意味が消されてしまい，偶発事も単なる修正すべき出来事として扱っていることが明らかとなった。また，セラピストの個人的特性との関連も示された。

第5節では，領域の狭間に発生し，訪れ破壊するものとしての偶発事の側面を，まず身体との関連から来訪神との類似性が考察された。そして人の力を超えた偶発事が心理療法にとっても抗いがたいものであることが示されるとともに，かろうじてそれを転機として活かしうる要素があることを示唆された。また遊びと偶発事の関連が「白ける身体」という視点から考察された。

最後に，手紙や電話での繋がりと偶発事について考察が広げられた。姿の見えない声や文字による交信は象徴的な存在との交信として体験されやすいことが考えられた。そしてそのような体験と偶発事の発生との関連が考えられ，人間の実体が介在しない声や文字による関係が，危険性を孕みながらも隙間を生み，展開をもたらす力を働かせうる可能性を持つことが考察された。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，心理療法における偶発事について，主に3つの自験例に基づきつつ，その意味や治療的な働きを考察したものである。

心理療法においては，時間・場所・料金という枠が重視されることからもわかるように，閉じられ，守られ，コントロールされたところで治療が行われることが肝要である。それは著者がin vitroという表現を用いているように，コントロールされた実験室のようで，外からの干渉や妨害が入ってこないようにされている状況である。実験室で生じることが計画や法則に基づいているように，そこには偶発事が入ってこないことが前提とされている。それによってこそ，無意識の意味や意図なども論じることができるのである。従って偶発事が生じてくるときには，治療的な枠が十分に機能していないものとして，否定的にみなされるのが通常である。それは内面化が十分でない，一種のアクティング・アウトとして捉えられてしまいがちである。

それに対して本論文は，心理療法における偶発事が必ずしも否定的なものではなくて，治療を押し進めるための決定的な役割を演じていることを指摘していっており，偶発事の肯定的な面に焦点を当てて論じたところが高く評価できる。もちろん著者も指摘するように，心理療法における偶発事の働きについては知られていて，ユングのコンステレーションや共時性という考え方はその典型的なものと考えられるし，またアリストテレスに拠っているラカンのテュケーという概念も，心理療法における偶発事の現れについて論じたものと言えよう。本論文はそれらの概念を整理しつつも，自験例に基づいて偶発事を検討したところがすぐれていると考えられる。

それぞれの事例における偶発事は，治療を妨害したり，セラピストの失敗であったりするかのような印象を最初は与えつつも，結果としては治療を推進していったことが非常に興味深い。すなわち一つめの事例では，セラピストの妊娠・出産がクライエントの内面の変化に対応していく。2つめの事例では，中断していたセラピーが，セラピストに講演会で会うという偶発事から再開し，また行き詰まったところで，偶然開けた箱庭の砂箱に砂漠のような荒涼とした世界が現れたことで展

開していく。3つめの事例では，クライエントが交通事故に遭うという偶発事によって，治療が展開していく。これらの事例は，偶発事が心理療法に対してどのように寄与するかを如実に示してくれているだけではなくて，時間・空間・料金による枠ということにも表れているように，内面化するというモデルをとっている心理療法において，外に出て行くことが逆説的に決定的な役割を演じることがあるというのも教えてくれている。あるいは，内と外の逆説的反転こそが心理療法において決定的であることさえ示唆していると考えられるのである。

この論文の中心となる3つの自験例では，偶発事によって心理療法がうまく展開していっている。しかし偶発事が必ずしも心理療法における転機とならない場合もあり，それについての考察も非常に興味深い。すなわち，いわゆる偶発事に意味づけしすぎるのも，また逆に単なる偶然として片づけてしまうのも，あまり治療的には有効にならないのである。

本論文における自験例は，心身症であったり，身体レベルで問題が生じてきたりするのが特徴的である。それに対しては，偶発事を病態水準との関連で捉えて，ここでの自験例をいわば相対化して考察をくわえているのがすぐれている。すなわち神経症レベルにおいては，偶発事は小さなものとして生じてきて，無視されやすい。それに対して精神病レベルでは，偶発事は日常的に生じてきて，偶発事の意味をなさなくなる。そのいわば中間にある心身症レベルにおいて，偶発事は意味を持ってくると考えられる。

偶発事に関しては，病態水準をはじめとするクライエントの要因だけではなくて，セラピストの要因も大きいと考えられる。著者はそれについて，学派の違いという視点で述べていて，それは一応説得力を持つものの，もう少し考察を深める必要があろう。また人類学的，文化的な視点から偶発事について論じている最後の部分についても，魅力的な分析ではありながら，やや全体の論旨からははずれているかもしれない。

偶発事を意味のないものとして否定してしまうことも，それに過度の意味づけをしてしまうことも治療的でないように，心理療法における偶発事は，危うい弁証法的構造の上に成り立っている。それは内と外の反転する瞬間であり，内面に籠もっていた心理療法が，外の現実へと飛躍することもあれば，外に漏れていって拡散し，消散するリスクもある。本論文における自験例についても，単なる守りの不十分さであるという批判も成立するかもしれない。また学派の違いについて，特に精神分析の立場についての考察が不十分であり，文献の引用に孫引きが目立つという批判もあった。しかしそれらの批判はあっても，心理療法における偶発事という興味深いテーマに対して，具体的な事例に基づいて論じていった本論文は貴重な成果を提供していると言えよう。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成19年3月28日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。